

聖書：ローマ 15：7～13

説教題：互いに受け入れなさい

日時：2016年8月14日（朝拝）

14章1節から記されて来たローマの教会の問題についてのまとめの部分です。教会の中は2つのグループに分かれて、互いにさばいたり、軽蔑し合ったりしていました。問題となっていた事柄について三つのことが上げられていました。一つ目は肉は食べても良いのか悪いのか、二つ目はぶどう酒は飲んでも良いのか悪いのか、三つ目は特定の日を守るべきか否か。パウロはこれらについて、どちらがより正しいかを論じ、片方に軍配を上げることによって解決しようとはしていません。確かにより正しい立場はあります。肉を食べても良いという立場と、肉を食べてはならないという立場は両立しません。しかし単純に白黒ははっきりさせたところで問題は解決しない。それはより正しい立場が示されても、すぐには受け止められない人々がいたからです。それは主にユダヤ人クリスチャンたちであつたらうということを述べました。彼らは長い間、律法に記されている食事規定のもとで、あるいは様々なカレンダーのもとで生活して来ました。そんな彼らは今やキリストが来られたから、その方を指し示していた規定はもはや守る必要がないと言われても、すぐには受け止められない。正解を告げられても心と体がついて行かない。そんな中、より正しい立場の人が強力にその立場を主張したらどうなるでしょうか。するとその人たちはつぶれてしまうのです。自分としては正しくないのではないかと思いつつながら、多数の人たちの強い意見に無理に従わざるを得なくなる。そうして彼らは心を痛め、滅ぼされることに至ってしまう。こんな状況の中でパウロが語って来たことは、それが本質的な事柄でない場合、それで罪を犯すのでない限り、愛によって自由を制限するということでした。良く分かっている人、洞察力の与えられている人は、肉を食べて良いことを知っています。しかしその人は、肉は食べてはならないのではないかと思っている人の前では肉を食べなければ良い。本来はどこでも肉を食べて良い権利と自由を持っているのですが、弱い人の前ではそれを控える。そして相手の人が正しい立場を受け入れるようになる日まで待てば良い。こうして私たちは平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つこととを追い求めましょう！とパウロは14章19節で言いました。また前回の15章1節では「私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。」と言いました。そのまとめが今日の箇所になされています。

まず7節でパウロは「こういうわけですから」と述べて「互いに受け入れなさい」と

命じます。これまでではどちらかと言うと強い人たちに向かって語られて来ましたが、ここでは両方の立場の人に向かって「互いに」と言われています。私たちはお互いに相手と同じ信仰の家族と認めて、愛し合い、敬い合い、大事にする交わりに生きるべきなのです。そ

の際の原動力について「キリストが私たちを受け入れてくださったように」と言われています。ともすると私たちは小さなことで他の人とぶつかって、もうあの人と一緒にやれない、あの人を受け入れられないという態度を取りやすいのですが、キリストは私たちをどのように受け入れてくださったのでしょうか。キリストはある意味で、何の条件も付けずに私たちを受け入れてくださいました。ただ一つ私たちに求めたことはご自身に対する信仰だけでした。足りない点を数え上げたらきりがありません。しかしキリストはそのままの状態です。教会はそういう者たちの集まりです。

なのにそういう私たちが他の人には色々条件を付けて、だから私はあの人とは交わらないという態度を取ったらどうなるでしょう。それはキリストの共同体に勝手な基準を設けて、そこに亀裂と分断をもたらすことです。教会はキリストのからだです。教会の主はキリストです。であるならば、キリストが受け入れている人を私たちは何の文句も付けずに受け入れるべきではないでしょうか。いくら私たちに主張したいことや強調したいことがあっても、ここはキリストの教会です。ですから主であるキリストの意向に沿って私たちはお互いを受け入れ合わなければならないのです。

またそれは「神の栄光のために」と言われています。キリストが私たちを受け入れ、救ってくださったのは、神の栄光のためである。これはどういうことでしょうか。私たち罪人を救うためにキリストを遣わしたのは父なる神でした。この神がキリストを通して私たち一人一人を救い、しかも私たちをキリストにあって一つの民、一つの家族とされるなら、確かにそこに神の栄光が現わされることとなります。本来、罪のゆえにバラバラで、決して一つにまとまることなどできなかった私たちが、互いに愛し合う一つの美しい共同体へと導かれるなら、それは神の栄光が豊かに現わされる場となります。ですから救われた私たちがお互いにどのような関係で歩むかは、実に神の栄光に関わっている事柄なのです。キリストがこのためにご自身をささげ、今なお働いておられる中、私たちがその御心に反してこれを壊す歩みをして良いのでしょうか。キリストが神の栄光のためにと働いておられるように、私たちもこの一大目標を見上げて、そのためにキ

リストに従い、互いに受け入れ合う歩みへと進むべきではないでしょうか。

パウロは続く 8～12 節で、キリストがしてくださったことをもう少し具体的に語っています。今、「キリストが神の栄光のために私たちを受け入れた」と言われましたが、それはもう少し具体的に言うのでしょうか。まずそれは 8 節にあるように、割礼のある者のしもべとなられたということです。「割礼のある者」とはユダヤ人のことです。マタイの福音書 15 章 24 節：「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外のところには遣わされていません。」キリストはイスラエルに優先して仕えられました。それは父祖たち、すなわちアブラハム、イサク、ヤコブら族長たちに与えられた約束を確証するものでした。しかしそれはさらに「また異邦人も、あわれみのゆえに、神をあがめるようになるため」(9 節) でした。つまり父祖たちに与えられた約束の中には異邦人に救いが及ぶことも含まれていました。異邦人の救いは、神のご計画に最初からあったことだったのです。その証拠としてパウロは旧約聖書から 4 つの御言葉を引用しています。9 節では詩篇 18 篇から、10 節では申命記 32 章から、11 節では詩篇 117 篇から、12 節ではイザヤ書 11 章から引用しています。いずれも「異邦人」という言葉が含まれていることは、見てすぐ分かります。これらの 4 つの御言葉はどのような意図で選ばれたのでしょうか。一つの見方は、ユダヤ人は旧約聖書を律法の書、預言者の書、諸書という 3 つの固まりに区分して考えていましたが、それらすべてから選ぶことによって、旧約聖書全体にこのことが言われていたことを強調しようとしたのだらうというものです。またもう一つの見方は意味がだんだんと強くなっているというものです。まず 9 節で引用されている詩篇では、神に賛美をささげる時、そこに異邦人もいるということが言われています。しかし 10 節によると、異邦人が主の民と共に喜びの賛美に加わるように招かれています。さらに 11 節では、異邦人が主体的に主をほめたたえるように招かれています。そして 12 節の御言葉では、「エッサイの根」という言葉で表現されているメシヤは異邦人を治めてくださり、異邦人はこの方に望みをかけ、メシヤの国に入れていただくということが言われています。

パウロはなぜこのようなことをここで述べたのでしょうか。それはこのローマの教会の問題の背後には、このユダヤ人と異邦人の関係という問題があったからでしょう。すでに述べて来ましたように、ローマの教会で対立していた 2 つのグループは、単純にユダヤ人クリスチャンと異邦人クリスチャンであると分けられるわけではありません。パウロのようにユダヤ人でも、キリストが来られたことの意義を正しく受け止めて、何で

も食べて良いという立場に立つ人もいました。その一方、反対に異邦人クリスチャンの中には、先輩格のユダヤ人にならって、旧約聖書の食事規定を守ったり、特定の日を守ろうとする人たちもいたでしょう。しかし大きな枠で見ると、やはりその根底には、このユダヤ人と異邦人の関係という問題が横たわっていたのです。私たちはすでに9～11章でイスラエルと異邦人の関係について見てきましたが、あの論述はまさにこのローマ教会の現実の問題があつて語られていたことだったことが分かって来ます。パウロは9～11章で述べた内容と同じ線に沿って、ここでも語っています。

まず彼は異邦人の救いに関する御言葉をたくさん引用することによって、ユダヤ人クリスチャンたちに対し、異邦人クリスチャンも立派な神の民であることを強調しています。異邦人の救いは前々から計画され、父祖たちへの約束に含まれていました。その計画に従って今、神は異邦人クリスチャンたちを受け入れています。ですから彼らをさばいてはならないのです。彼らを受け入れなければならないのです。一方、異邦人クリスチャンたちに対して、パウロはここでもユダヤ人の優先性を確認しています。異邦人はそのもとで祝福を受けた者たちです。ですから決してユダヤ人クリスチャンたちを見下してはならないのです。むしろ彼らを認め、彼らに感謝し、彼らを尊んで受け入れなければならないのです。私たちはここに改めて神はユダヤ人と異邦人からなる一つの民を作ろうと最初から計画されたことを知ります。この両者は一つになることなどとても考えられない関係にありました。世界に見られる分断の象徴でした。しかし神は彼らが和合する一つの民を作ろうとされた。そのためにキリストが来られて、命を捨てて、仕えてくださった。なのに私たちはそのようにして造られている共同体を壊して良いのでしょうか。むしろこの神の御心を仰ぎ、感謝して、このもとで自分の振る舞いを考えるべきではないでしょうか。

最後13節でパウロは神に祈ります。「どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。」 私たちを見つめるだけなら、ここにあるのは果てしなく難しい課題です。生まれも背景も考え方も違い、些細なことで争ってしまう私たちが一つになるなんて、実現しそうにないことではないでしょうか。しかし望みは神にあります。神がこのことを計画されたなら、必ず成し遂げられます。私たちはこの神を見上げて望みを与えられ、神に祈り、神に従って行くようにとされています。この神があなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たしてくださるように、とあります。「喜び」と「平和」

については、14章17節で神の国のエッセンスとして出て来ました。詳しくは繰り返しません、つまり私たちはキリストへの信仰に生きることによって、神の国のエッセンスである平和と喜びに益々豊かに生きる者にされるということです。そこからさらに「望みにあふれさせてくださるように」と祈られています。ここの「望み」とはユダヤ人と異邦人からなる一つの民が実現するという望みのことでしょう。争い合っていた者たちが一つとなってもに神をほめたたえる日が本当に来る。そのことをいよいよ確信して望みにあふれるのです。それは聖霊の力によります。聖霊も14章17節に出て来ました。この望みはこの世がもたらすものとは全く質が異なるということです。聖霊は天国の祝福を先取りさせてくださる方。この聖霊によって、私たちは争い合っていた者たちが一つとなるという天国の前味をこの地上でも味わい、益々その望みにあふれる者とさせて頂くのです。

私たちは以上のパウロの勧めと祈りを自分のものとして歩む者でしょうか。改めて今日の御言葉から学ぶことは、神が私たちに下さる救いは、単なる個人的なものではなく、共同体的なものであるということです。神は私たち一人一人を救ってくださるばかりでなく、より大きな一つの民の祝福へ導かんとしています。その神の御心をわきまえず、自分勝手な振る舞いで、神のみわざを壊していることはないでしょうか。私たちは神が持つておられる歴史を貫く大きなご計画をしっかりと見上げたいと思います。その実現のためにキリストが来てくださり、命を捨ててくださり、今もその働きをなさっておられる。このような神の働きのもとで、素晴らしい救いに入れられた私たちです。その私たちは神とキリストの御心をわきまえ、恐れつつ、自らの取るべき振る舞いを良く考えたい。私たちに命じられていることは、神が受け入れているように、またキリストが受け入れてくださったように、互いに受け入れなさいということです。与えられている自由を愛のもとで用いなさい。力のある者は力のない人の弱さを担いなさい。平和に役立つことと互いの霊的成長に役立つことを追い求めなさい。この歩みを通して神の栄光は豊かに現わされるのです。私たちはそのことを受け止めて、自らの歩みをささげたいと思います。そして喜びと平和に満たされ、また聖霊によって望みにあふれて、私たちをこのように導いてくださる素晴らしい神を宣べ伝え、人々をこの祝福へ招く歩みに進みたいと思います。